

お話大臣

太田 龍 東

第四 鬼神の妻

妖怪が太刀を振上げて、文雄の腕を斬らうとい
 たしましたとき、僧侶が二足の可愛らしい犬を連
 れて参りましたが、今文雄が斬らうとするを見て
 側により、

『甚麽理由か知らないが、この人を斬るのは暫ら
 く待つて下さい。私は僧侶の身でありますから、
 人の斬られるのを見れば、之れを助けねばなりま
 せん、什麼その理由を一通り聞かして下され。』
 と申しますと、妖怪は又邪魔ものが来たかと云
 ふやうな顔附で、その刀を下げながら、文雄が俺
 の弟子を殺したゆへ、其仇を討つことを話しまし
 た。すると僧侶は

『那麽では、拙僧が餘程不思議な身の上話をしま
 すから、この人の罪を宥して遣つて下さい。』

と頼みました。妖怪は元より話好きであります
 から、早速承知いたしました。僧侶は説教口調で
 次のお話しを語り出したのです

私には二人の兄弟がありまして、今これにあり
 ます二足の犬が即ち兄弟でゝいます。私の父が死
 にますときに、私等三人の兄弟に、金五千圓を分
 けて與へられましたから、皆思ひくのことをい
 ましたのですが、二人の兄弟は、放蕩をして一年
 の間に、その金を悉皆無くしてしまいました。し
 なたがありませんから、暫らく私の家に養つて遣
 つていまして、二人のものは悪心を惹起まして、
 私を殺して財産を分取せうと相談いたしましたので
 づいします。

ある夜私と妻が、二人
 睡てゐる透を伺ひまして
 手足を縛り二人とも海の
 中に投込みました。する
 と、私の妻は奇術を知つ
 てゐるものと見へ、魔術
 を行ひて私の身を抱き、
 海中の一孤島に飛んで行
 きました。しばらくする
 と夜は明け東の空は白ん
 で、太陽の光りは海波に
 映つて赫々として参りま
 した。その時妻が私に向
 つて申しますには
 『妾は、足下が今の禍難



十
 あることを元からよく存
 じておました。正直な足
 下が、こんな禍難に遇ひ
 なざるを氣の毒に思ひま
 したから、先日足下の妻
 となつたのです。それで
 今日この禍難を救ひまし
 たなら、お暇乞をする都
 合でムいます。』
 私は、これを聞いて大
 に驚き、
 『貴女が今日私の禍難を
 助けて呉れたのは、有り
 がたい事であるが、今に
 なつて何故私と別れるの

か、又魔術は什麼して知つてゐるのか。』

と云ひますと、妻は

『足下は、まだ妾の身分を知らないから、不思議なのも無理はありません。妾は元人間ではなく、世の人の云ふ鬼女でゐます、妾は過去の世に於て、足下に助けられたことのあるものでありますから、その御恩返しに、今日お助け申しました。』と云つて妻は涙を流し、暫く泣いてゐましたが、又口を開いて

『こゝで彼是申してゐましても、仕方がありませんから、之れから宅まで歸りませう。私が鳥になつて、足下を乗せますからお乗りなさい。』と云ふかと思ふと、妻はすぐ大きな鶴になりました。私は其妻の鶴に乗りますと、鶴はバア／＼と立つて、廣い／＼青々とした海を、見る間に渡つ

て私の家の屋根の上に下りました。すると鶴は元の人間になつて、私に申しますには、

『足下は、生命は助かりましたが、二人の兄弟を殺さないで、又甚麼ことをするか解りませぬ。那で、妾がこれから下りて生命を絶つて参ります。』

と云つ、下ようとしていますから私は急いで止め、私を殺さうとした兄弟の心は憎むべきであるが、我が血を分けた同胞だから、殺すことだけは免るしてやつて下さい。』

と云ひますと、妻は

『それでは、足下のお慈悲によつて殺すことだけは止め、獸に化しては如何ですか。』

と云ひますから、私は

『那麼ならばよろしが、一生畜生の姿として、

終らせるは實に可哀そうでならぬ。』
上申しますと、

『そんなに申されるなら、今から先十ヶ年間淺ましき畜生の姿となし、其罪を罰してやりませう。』と云つて、屋根を下りて参りました、私は屋根の上は暫時待つてゐますと、施て妻は再び登つて來まして

『まあ下りて下さい。』

と申しますから、下りて家の中に這入つて見ますと、二頭の犬が、私の側に駈來りて、足に纏はつたり袖を噛へて尾を振つたりして、さもなつかしうにします。私もこれが兄弟かと思へば可愛そうになり、暫らく犬を見詰めました

すると妻が側に來まして、涙を流しながら

『足下、妾はこれでお暇いたしますから、随分御

十二
丈夫でお暮しなさい。さよなら。』

と云つたと思ふと、妻の鬼女は、姿を掻消すやうに蜻蛉の跡も止めず失へてしまいました。

私は、其鬼女の所在を尋ねる爲め僧侶となり、この兄弟なる犬二頭を連れて、諸國を巡つてゐる内、端なく此所を通り合せたものであります。之れを聞いた妖怪は、

『爾の話は實に奇怪で、餘程面白かつたそれでこの男の罪の三分の一を更に免るし、腕と脚を斬る所を、今の話により腕だけ止めて今度は脚を斬るから、さあ脚を出せ。』

と云つて、又刃を振り上げて文雄の脚を斬りかけました。

花太郎は、こゝまで話して王に向ひ

『我が王様よ、日が暮れかれましたから、今日は

これでお止めに致しませう。』
と申して、室へ下りました。

第五、兄弟の約束

かの哀れなる文雄は、今妖怪が振り上げし一刀のもとに、その脚は將に斬りやらうとしました。すると又こゝに一人の、花のやうな美しい十七八の娘が遺つて来りました。今参りましたこの美しい娘は、斬られかけてゐる文雄の妹なので、文雄が魚釣に出たぎり、餘り長く歸らないものですから、心配してこゝまで迎へに来たのであります。迎に来て見るとこの有様ですから、娘はすぐ妖怪の側に参り、泣きながら申しますには

『若し、暫らく待つて下さい、これは妾の兄でございまして、妾はその妹の雪江と申すものでございまして、兄が甚だ悪いことを爲たか存じませんが、悪

い所は幾重にも謝りますから、切望免して下さい。』

すると妖怪は、文雄が俺が弟子を殺したことや、この二人が面白い話をした爲め、その罪の三分の二を免し、いまその残りの罪を罰せうと思つて、脚を斬るのであると云ふことを語つて聞かせました。

娘は、側に人のあることに初めて氣が付きまして

『お二人とも、何所のお方かは存じませんが兄の爲めに、いろ／＼お骨折つて下さつたさうで、有りかたう存じます。』

と禮を述べ、又妖怪の方に對つて

『もし魔王様、このお二人がお話し成れたゆへ、兄の罪の三分の二をお免し下つたのなら、今妾が

お話一つ申上げば、残りの三分の一の罪を、お許し下さいませうか。』

と恐れ／＼申しますと、妖怪は、今日は話しをする人のよく来る日だな、と云ふやうな顔附きで、『お前のやうな、可愛らしい娘の子がお話するなら、兄の罪は悉皆免してやる、さあ早く聞かしてお呉れ。』

と云つて、今までの恐ろしい風は何所へやら無くなつて、娘の顔を見てニコ／＼笑つてゐます。娘の雪江は、大層喜びまして、椿のやうな可愛らしい口から、鶯の囀るやうな清らかな聲を出して、次のお話をいたしました。

ひかしある所に、二人の兄弟がありました。兄を松雄と云つて、弟を梅雄と云ひます、この二人の仲のよい事と云つたら、口では申されない程で

ムいます。學校に行くにも二人連れ、遊ぶにも二人連れ、寝るにも二人連れ、ご飯食べるにも二人連れ、又お使ひに行くにも二人連れと云ふ風に、何時も二人は鎖のやうに連鎖して、離れたことはありません。

そこで、二人が約束をしたのであります。それは甚麼約束かと申しますと、もし一人が居ない時は、面白いことがあつても爲いで、二人になるまで待つてゐると云ふことであります。

ある時、兄の松雄は、一羽の鸚鵡を買つて参りました。この鸚鵡は、人の話しをよく聞き、又其目の前で出来たことは、甚麼ことでも記憶てゐて、人に精しく語る名鳥であるから、大層重寶な鳥であります。松雄は、この鳥を自分等の居間に飼置で、自分の留主の間でも、弟の梅雄が、二人の約

東をよく守つて、面白いことがあつても、一人で爲ないで待つてゐるかゝるないかを、試めして見るに都合がよいと、喜んで大切に於て養ひました。が弟は、そんな事とは知らず、只普通の鳥だと計り思つてゐたのです。

恰度日曜の日でした、兄の松雄は、少し用事があつて、一人で三里程離れた田舎の、叔母さんの所へ参りました、梅雄は、兄が留守ですから、一人で居間にゐて本を讀んでゐますと、お友達の憲太郎と云ふのが、遊びにやつて來ました。

『梅雄さん、今日は君一人ですか、兄さんは什麼して。』

と尋ねますから、梅雄は

『憲さん、今日はね、兄さんは叔母さん所へ住つたから、歸へるまで遊び給へな。』

と云ひました。又憲太郎は

『不錯、何時頃歸つて來るの。』

と尋ねると、梅雄は

『今日晩でなければ歸りませんよ。』

と答へました。すると憲太郎は

『梅雄さん、今日はお休みだから、お芝居に行かうと思つて誘ひに來たんだが、松雄さんが居ないのは残念のやうに思はれるけれど、留守なら仕方がないから、二人で往うじやないか。』

と勧めますから、梅雄は、二人でないと何所にも往かれないやうな、約束が兄としてあるから、今日は止めにするよと云つて断はりましたが、憲太郎が餘り勧めるものですから、梅雄も遂に其氣になつて、兄に内密で芝居見に参りました。

梅雄は、午後からの五時頃、芝居から歸つて、

何知らぬ顔してゐますと、兄の松雄は、弟より一時間程先に歸つて、弟が憲太郎と二人で、芝居に往つたことを聞いて、詳しく知つてゐますから、弟に對つて

「汝は、今日何所に往つてゐました。」
と尋ねますと、弟は

「お友達のところへ遊びに往つてました。」
と答へます。兄は大層怒りまして、憲太郎と芝居に往つたことを詳しく話し、約束をして置きながら、それに背くのはよくない事であるから、將來約束を守るやうにと誠めました。

梅雄は、誰も知つてゐる人は無い筈であるのに、兄が詳しく知つてゐましたから、不思議で堪りません、其後いろ／＼考へた末、鸚鵡が告げたことを知りました。そこで梅雄は、什麼かしてかの鸚

十六
鵡に、其讎を復へしてやりたいものだ、夜も晝もそれ計りを考へてゐますと、恰度兄の松雄は、用事のため一夜泊りで、又叔母さんの所へ行きました。

梅雄は、這麼ときに仇を討たねば、討つときは無いと思つて、一つの工夫をして、憲太郎と二人で、面白い仇討をしました。

夜中頃に、憲太郎は鸚鵡の這入てゐる籠の下に潜んで、粉挽臼を烈しく、ゴロゴロ／＼と挽鳴して、恰度雷の鳴るやうな音をさせました。すると梅雄は、時々籠の上から、滌瀝を以て水をザア／＼と、大雨の降るやうに濺さかけ、次に一方では、遠方から鏡を以て、洋燈の光りを鸚鵡の目の前に、右と左からキラ／＼と、恰度電光りのするやうに反射しました。

さす憐うなつては鸚鵡は大變です、家の中に俄かな大きな夕立が遣つて参りまして、頭からは大雨がザア〜とかゝる、雷はゴロゴロ鳴る、電光りはピガ〜、眼を射すのですから、誰だつて堪つたものではありませぬ、逃げふと思つても、籠の中の鳥ですから、自由にならず、泣くにも泣かれずと云ふ風で、鸚鵡先生は大閉口をしてあります。梅雄や憲太郎は、早く止めてやればよいに、可哀さうに夜の曉けるまで、繰返し〜て雷さまや雨降りの役を遣つてゐたのです。

松雄は、翌日歸つて参りまして、人の居らぬを幸ひ、直ぐ鸚鵡に對つて、昨夜の出来ごとを尋ねますと、鸚鵡は涙聲で

『若旦那様よ、私は昨晩のやうな目に逢つたことは無いませぬ。私の嫌いな雷はゴロゴロ〜止み間な

く鳴り、大雨はこの室まで降り込んで、頭の上からザア〜とかゝります、電光りは烈しく光つて、朝までの難儀は、私の口では申上げられませぬ。』と申します。松雄は之れを聞き、大層怪しく思ひ、昨夜は近頃ない晴天で、星は降つたかも知れないが、雨の降るやうな天気ではない。それに時候は冬であるのに、雷鳴の音がする筈はない。それであるに、鸚鵡は大雨が降つて雷が鳴つたなど云ふのは、畢竟我を偽り欺くのであらふ。して見ると、先日弟が芝居に往つたと云ふのも皆偽りで、無いことを誠らしく功名顔のやうに語つたのに相違あるまい、と思ふと松雄は俄に腹が立ち、前後の考へもなく、かの鸚鵡を籠の中から引出し、力任せに庭石の上に、ハタと投付けましたから、可哀さうに鸚鵡は、其儘息絶へて終いました。

其後松雄は、暫らくして近隣の人に、鸚鵡の言

つたのは虚言でなく、弟の梅雄が、芝居に往つたのが實であることを聞き、松雄は後悔しても、過ぎた事ですから、詮方がありませんでした。

娘の雪江は、右の話しを濟まして妖怪に對ひ、

『妾の話は、這麼面白くないものでムいすが、これで終りましたから、什麼か、兄の罪を免して遣つて下さい。』

と頼みますと、妖怪は、

『それでは、全く罪は免してやる。』

とこれだけ云つて、見る間に其姿は烟のやうに消失てなくなりました。

この時文雄の欣喜は甚麼であつたでせう。猛虎の口の中から、脱れたやうな心地して、天に歡び地に欣喜び、手の舞ひ足の踏をも知らないばかりで

した。三人の人も共俱に喜び、迭に慰め慰められ

てゐましたが、何時まで恙うしてゐる譯には參りませんから、別れを告げまして、文雄は妹の雪江と我家に歸りました。

花太郎は、話し終りまして王に對ひ

『我が王様よ、これでこのお話しは終りました。』と申しますと、王は

『朕は、今迄こんな面白いお話しを聞いたことは無つた。汝は話が上手だから、今日から話大臣と云ふ位を授ける。』

と賞められて、花太郎は、大臣の位になりまし

たとさ

(めでたし〜)